



「自分づくりの段階表」の意義と可能性 : 教育実践と発達理論をつなぐ試みとして(要旨)

渡部, 昭男
國本, 真吾
児島, 陽子
澤田, 淳太郎
中村, 隆一

(Citation)

日本特殊教育学会第57回大会 自主シンポジウム10-4 「自分づくりの段階表」の意義と可能性 : 教育実践と発達理論をつなぐ試みとして

(Issue Date)

2019-09-23

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006359>



「自分づくりの段階表」の意義と可能性

—教育実践と発達理論をつなぐ試みとして—

企画者：渡部 昭男（神戸大学大学院人間発達環境学研究所／元鳥取大学附属特別支援学校校長）

司会：國本 真吾（鳥取短期大学）／渡部 昭男（同上）

話題提供者：児島 陽子（鳥取県立白兔養護学校／前鳥取大学附属特別支援学校）

澤田淳太郎（鳥取大学附属特別支援学校）

指定討論者：中村 隆一（立命館大学大学院人間科学研究科／人間発達研究所所長）

KEY WORDS：自分づくりの段階表、鳥取大学附属特別支援学校、教育実践と発達理論

【渡部 昭男：企画の趣旨】

第 55 回大会においては、鳥取大学附属特別支援学校（以下、鳥大附属）と神戸大学附属特別支援学校から話題提供をいただき、『自分づくり』を支援する教育実践の創造と展開について検討した。今回は鳥大附属の「自分づくりの段階表」に焦点を絞り、「自分づくり」の視点から教育実践と発達理論をつなぐ試みの意義と可能性をさらに深めたい。

鳥大附属では 1979 年度、独自に設定した 4 分野（自立化・社会化・表現化・職業化）の具体的目標を達成するために「段階別教育内容表」を作成した。以降、1981・84・98・2008 年度に改訂し、活用してきた。98 年度改訂の際に「自分づくり」の観点が加味され、渡部が校長兼任時（2002-05 年度）において同校研究部が寺川志奈子氏（鳥取大学）と協力して、「可逆操作の高次化における階層—段階理論」を参考に試作したのが「自分づくりの段階表」である（渡部・寺川監修 2005 『自分づくり』を支援する学校』明治図書、小中学部用 pp.28-29、高等部用 p.30）。そして、高等部専攻科が 2006 年度に開設されたことに伴い専攻科用が追加された（渡部 2009 『障がい青年の自分づくり』日本標準、pp.128-129）。

【児島 陽子：小学部・中学部における「自分づくり」】

鳥大附属では、児童生徒の心の育ちをとらえる視点や指標として「自分づくりの段階表」も活用し、「自分づくり」の実践や支援に生かしてきた。A は自閉スペクトラム症の女児で、201X 年に高等部に進学した。小学部 1 年時と中学部 3 年間の姿やエピソードを通して、A の「自分づくり」について紹介する。小学部 1 年時、自分の思いが通らないと大声で泣いてパニックになり、初めての場面で不安になると固まってしまうことが多かったが、中学部 3 年時には「もう自分は高等部に行くから」とかつて先輩に教えてもらった“鬼ごっこ”のやり方を中 1 の後輩に自ら教えようとする姿が見られた。そこには発達年齢を超えて、これまでの生活経験を基盤にしながらいながら集団の中に自分の役割を見出し、その役割を果たそうとする A の生活年齢の重みや内面の成長が感じられた。

「自分づくりの段階表」を活用することで、子どもの見方が変わる、教師の立ち位置が変わる、実践が変わると実感している。一方、児童生徒の姿からだけでは「自分づくり」のどの段階にいるかを特定することが難しい等の課題もある。

【澤田淳太郎：高等部・専攻科における「自分づくり」】

高等部専攻科での「お笑い」を教材にした実践を紹介する。

軽度の知的障害で自閉スペクトラム症の青年 B・C について「自分づくりの段階表」も使いながら発達のにとらえつつ実践を進めた。「犬猿の仲」とも言えた 2 人は、実践を通してお互いの関係性を変化させていった。そこには以下のような重要なポイントがあったと考えられる。一つ目は青年たちの価値観が転倒していったことである。他律的道德感が強い時期に学校に入ったらあいさつをしないといけない等、「～せねばならない」という意識が脅迫的に強まる場合がある。彼らにもそうした姿があったが、「お笑いコント」を創りあげていく中で、脅迫的で固定的になっていた自身の価値観を変えていった。二つ目は意見の衝突の調整である。交流する県外の専攻科生を笑わせるという目的のために、お互いの思いを衝突させながらも、折り合いをつけ調整していった。

こうした姿の発達の背景には、「集団的自己というものの成立を経験することにより価値を見出している」ことがあるのではないかと考える。

【中村 隆一：教育実践と発達理論をつなぐ試み】

education と development は、近代教育学の登場と連動し、その関係にあらたな意味を付与されてきた。日本でも、すでに小学校令にみるように学校教育の開始時から、現在の学校教育法と同様の扱いがなされている。その中身は、「発達に依拠して」という〈準拠枠〉概念が基本でありながら、幼稚園では「保育」や「環境」による「発達」を目的とする〈目的概念〉とがあった。前者の〈準拠枠〉が独り歩きすると、教育の下限の恣意的設定が生じかねない。子どもの権利条約・障害者権利条約において〈目的概念〉として「人格の全体的発達」が位置づけられていることの意味はここにある。こうした「発達と教育」の深まりは実践知の蓄積に依拠するが、知的障害がある場合には、発達論の再構成が不可欠であった。特に古典的な知能研究は先天性・恒常性を前提に出発し、「精神薄弱」の発達を結論的には否定し、その克服が発達論の中心課題となった。求められる発達論では「発達の過程の法則的理解」が大きな課題となってきた。現実の教育場面における人格形成の過程における発達の根拠の提示が発達論のあらたな課題となっているとの立場から、討論に参加したい。

謝辞：本企画への三木裕和氏（鳥取大学／同附属特別支援学校校長）並びに関係者のご理解とご協力に感謝致します。（WATANABE Akio, KUNIMOTO Shingo, KOJIMA Yoko, SAWADA Juntaro, NAKAMURA Ryuichi）